

## 1998年度全カリ総合A群「人権とマイノリティ」

—部落問題と学問—

川元 祥一

## 一. 部落問題とカテゴリー

部落問題は人種問題ではないし民族問題でもない。日本社会の歴史の中で生れた社会的矛盾、あるいは社会的階層の問題であり、それは多くの局面でその時代を象徴するであろう価値観や観念に左右されているとはいえ、それはまた歴史の過程で生れた社会的制度の問題なのだ。だから私は部落問題をマイノリティの問題として捉えることに躊躇を感じる。マイノリティという言葉は必ずしも人種や民族だけを対象とした概念ではないにしても、多くの場合、その概念をもって使われてきたと思うからだ。

そのため全カリの担当者から私の講義のテーマを「人権とマイノリティ」としてはどうかと提案された時、少し考えさせてくれといった。出来ればマイノリティという言葉を使わずに部落問題をカテゴリー化し講義のテーマとしたかった。そのため一日か二日考えてみたのであるが、私が思うほどには適当な言葉、概念は考えられず、やむをえず提案を了解した。

具体性としては部落問題をテーマと

しながら総合教育科目で「人権とマイノリティ」という講義を行なったのは、九八年前期であるが、そのころ私は、部落問題を日本社会の特異な問題、特別な問題とするのではなく、社会全体、あるいは広い意味での日本文化全体の中で捉え、それをどのようにカテゴリー化すべきか考えていた。そうでないと部落問題の真の意味での解決は出来ないだろうとも考えていた。しかも部落問題というのはストレートに日本人一般の中から発生し（差別者が一般的な日本人のあいだから発生する以上それは日本人のマジョリティの）人権意識や価値観・観念の問題なのだ。このことを認識しない以上、日本人の人権意識、あるいはその認識もまた標語や格言的なレベルにとどまり、血となり肉となることはないだろうと考えていた。

このようにして引き受けた講義であるが、講義の内容を日程にあわせて考えている時、私は私なりにこれをカテゴリー化して講義しようと考えた。そしてそれを構造主義などのあいだで使われてきた“周縁”という言葉・概念で表すこととした。部落問題を日本社

会あるいは文化の(社会と文化という言葉と同時に使うのはいかにも曖昧な使い方であるが、部落問題がかつて社会制度でありながらも制度がなくなった後も価値観や観念として残っていることを考慮し、今のところかんべんしていただきたい。部落問題が今なおこのような曖昧さを残していること自体が、私のこの発言の根拠となっている)周縁の問題として捉え、その位置から問題を考えようとした。そのことは当然、構造主義で言われる“中央”が関係概念として含まれているのであって(私は構造主義者ではないが)、両者によって社会・文化全体を捉え、そのことで部落問題をカテゴリー化出来ると考えた。

## 二. 全体系と周縁

これまで部落問題を語る時、あるいは考えたり学んだりする時、その内容は主に部落差別のことであり、ことに差別の対象として歴史的にも現代的にも存在する被差別者の体験や実態、あるいは差別に対する抵抗の歴史や差別解消の運動などに焦点が当てられ、アプローチされてきた。

もちろん、このようなアプローチが大切であることはいうまでもない。今なお部落差別は存在するし、根深いものがある。その実態や被差別者の抵抗・解放運動を直視しないかぎり、この問題の解決は見られないのみならず、いつ差別する立場になるかも知れない日本人のマジョリティは、差別の

内側にある価値観や観念(その歴史としての社会や文化)に目をつぶるか、せいぜい無知のまま平和や民主主義、あるいは愛や正義を語ることになるのだ。このことは日本人にとって、ことにマジョリティにとって、このうえなく不幸な事態だと私は考える。

さらにそのうえ、部落問題はこのレベルで終わってはならない。部落問題というのは、陰にかくれて密かに(あるいは一方的な予断や偏見だけで)行なわれる差別や、それへの抵抗だけでなく、もっともっと多くの問題、あるいは課題を内包している。たとえば、マジョリティがもっている(あるいはそうになってしまう)差別する観念の社会的・文化的背景とか歴史を考えただけでも、それがマジョリティの課題でありながら未だに解明されていないし、学問として確立されていないことなどだ。この課題は感情的な対応やマイノリティの問題として片付けてはならない。社会的、歴史的、あるいは哲学的課題になるはずなのだ。このことに気づかないのは、大学をはじめ日本の学問全体が近代になって欧米のその体系を模倣するだけにとどまっているせいだと思う。欧米でもどこでも学ぶべきものは学び取ろう。しかしだからといって自分たちの国の歴史が内包する課題を捨ててはならない。その課題を抽象化し普遍化することが学問ではないだろうか。

もうひとつここで述べておかななくてはならない課題がある。講義のテーマ

が「人権とマイノリティ」であることからして「人権」をどう考えて講義にのぞむかということだ。人権を抽象的、哲学的に思想化することは可能ではあろうが、部落問題として考えるとこれは非常に具体的な事柄なのだ。私は人権について「それは人々の愛と良心を実行し貫くことの出来る自由だ」と考えている。こうした考えをもとに、部落問題の具体性を分析したり抽象化することとした。

### 三. 部落問題は面白い

以上述べてきたことを前提として私は講義の内容を大きく三つの柱に分け、それぞれを細分化していった。三つの柱は次のものだ。

- (1) 日本社会・文化の周縁
- (2) 現代の部落問題
- (3) 日本文化と部落問題

以上の概要を柱として示しながらも、本題に入る前に学生にいったことがある。それは「部落問題は面白い課題なのだ」ということだ。教室にいた学生がこの言葉をどのように受けとめたか確かめてはいない。しかし一人か二人の学生がレポートに書いた感想からすると、この言葉は意外な感じで受けとめられていたようだ。

私は筑波大学でも講義をしたことがある。その時の体験からすると、学生たちは部落問題を重い問題、暗い問題と思っていた。このことは社会一般でもほぼ同じだと思われる。そしてそこには軽視してはならない原因があり理

由がある。このことについて詳しく述べるつもりはないが、それが部落差別の歴史であり現実である。つまりその実態がかもしだした実感であり印象なのだ。しかし、そのような実感や印象にこだわってはいは部落差別そのものを超えることはむずかしい。

もちろん、だからといって内実もなく明るい材料をならべたからといって意味はない。そこでは明確な形で視点が変らなくてはならない。そのためこの言葉を投げかけた。そしてその内容と意味を説明した。

ひとつの例をあげるなら、最近の経済危機と部落問題である。最近の経済危機と部落問題は直接的には関係ない。しかしこれを日本の社会構造・体質の問題とするなら、それらと部落差別（結婚差別や就職差別、あるいは無意識のうちにある文化的構造による差別など）を今も残す社会構造・体質は通底するところがある。

国の行政を掌握する官僚と経済界の一部が癒着した“護送船団”というのはこの経済危機のなかでクローズアップされ、諸外国からも批判的になっている。この“護送船団”をあらためて説明する必要があるとは思わないが、金融界を例にとればその体質がよくわかる。資本主義経済は自由競争だと建前上でいいながらも、日本の銀行のすべては大蔵省の指示にしたがい、相互間の自由競争を規制しあってきた。

このことは“船団”の内部では自分

たちの勝手だと思われがちであるが、外部からすると、自由競争による他者の参入を拒む体質なのだ。このことが諸外国から批判されてきたのであるが、国内的に考えてもこれは特異な、停滞を生む体質だ。なるほど経済的にはこれまでこの体質によってある程度の成功を見てきたかも知れない。しかし、日本人すべてにあてる精神的弊害ははかり知れない。つまりここでは権力と癒着した一部の者がその“特権”とか“権益”を得るだけであって、その他の者はその“特権”“権益”から排除されている。

この排除が部落差別と直接関係あるとはいえない。しかし、日本の経済界の多くの場面で、金融界に見られた“護送船団”体質が見えてきたのだ。国家予算を使う公共事業とゼネコン各社、あるいは日本の建設業界の体質が同じように見られている。あるいは最近あかみに出された防衛行政と産業の癒着など。

このような体質が日本社会の多くの部門に見られることは、これまでさまざまな情報が知らせている。そしてこのような社会の体質は、封建社会からの被差別者を自由競争から排除し、差別してきた体質と通底するものだ。

もちろん私が指摘する通底はもっともっと細かく分析し、考慮されなくてはならない。とはいえ、部落差別とほとんど体質を同じくする閉鎖と停滞、排除の構造が日本社会の多くの部門に見られることはたしかなのだ。

このことからいえることは、部落問題はけっして被差別者固有の問題ではないということだ。同じ体質は日本社会の多くの部門にある。そしてこれは、これから日本社会を基盤に生きてゆく若者が直面する問題であり、課題なのだ。

このことを私は講義の最初に学生に話した。だからこそ若者が解明し克服すべき課題がある。だからこそ部落問題は面白いと。

#### 四. 新しい傾向か?

筑波大学で講義を行なったのは六年前である。前にも書いたとおりこの時の学生の部落問題への印象は、大半が「部落問題は重くて暗い」というものだった。また、東日本の中学や高校を出た学生と西日本の学生とではその印象が大きくちがった。

西日本出身の学生は中学や高校で「同和学習」を受けていた。そしてその学生のほとんどが「同和学習は二度と受けたくない」と思っていたことだ。東日本の中学や高校では「同和学習」をほとんどやっていない。だから学校での印象は薄いものの「重くて暗い」印象はかなりはっきりともっていた。

ところが、今度立教大学で講義をし、学生のレポートを読んで気づくのであるが、筑波大学で私が感じ取った学生の印象がほとんどなかった。レポートの中には講義を聞かずに書いたと思われるものもあり、そのようなレポートは部落問題への疎遠感や偏見の片鱗が

見えるものの、多くの学生は先入観なく、あるいは先入観ぬきに私の講義を聞いてくれた気がする。

これら両大学における学生の反応の違いに私は内心驚いた。それほど明確に違いがあらわれた。この違いは何を意味するのか。一度の講義だけでは判

断出来ない。しかしもしかして、若者たちのあいだで、部落問題の印象が変っているかも知れない。そしてその変化は、部落問題を本格的な学問とするために良い傾向ではないかと考える。

(かわもと よしかず

本学全カリ運営センター非常勤講師)